仕事が楽しければ人生も愉しい

GOETHE

[ゲーテ]

3

March 2008

750 yen

Cover
George Clooney

2008年3月1日発行(毎月1回1日発行)第3巻第3号通巻24号

追跡特集
小林繁 元阪神タイガース
人生最後の仕事

山崎まさよし、スガ シカオ、
スキマスイッチ… 業界に旋風

オフィス オーガスタ
森川欣信の生き様が作り出す、音楽ビジネスの魅力

ニューヒーローの肖像
プロボクサー、塗装職人から100億企業のCEOへ
小笹公也 オンテックス

緊急特集
日本人をなめるなよ! ミシュラン

「24時間仕事バカ!」が選ぶ
最高最強のレストラン50

体を張ってでも
出かけて行くのを
お引き留めしたい店
15軒付き

独占取材
中国から国賓待遇で
迎えられる
谷絹子が30年 U.F.O. 貫く仕事術

世界初! 五輪スタジアムの
内部撮影にも成功

ニューヒーローの肖像

小笹公也

株式会社オンテックス
代表取締役会長兼CEO

プロボクサーから塗装職人の親方、
今や関西有数の企業を率いる

1000億を目指す親方CEO

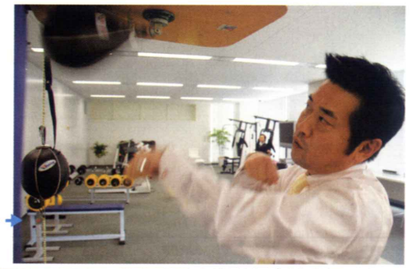
バブル後に厳しい不況を迎えた業界で、
驚くほどの躍進を遂げた会社が大阪にある。
84年に設立、塗装工事に特化し、
10年で売上は5倍以上。その代表はプロボクサー、
塗装職人からこの会社を築いた――。

上阪 徹=文　福森クニヒロ=写真
Text by Toru Uesaka Photograph by Kunihiro Fukumori

阪神競馬場の役員席にて。23頭の馬主でもあるが、生粋の勝負師でもある。取材を忘れて賭けた馬に大きな声援を送っていた。

大きなビルを建てるのは中学の頃からの夢。大阪本社勤務200人が快適に仕事する

14階建ての現在の本社ビルは大阪屈指の繁華街・難波のど真ん中にある。これが3度目の自社ビル建設。土地も所有しての自社ビルだ。「バランスシート上、不動産は借りたほうがええのかもしれません。でも、そういう問題やないんです。数字だけで会社はやれるもんやない」。これで満足している雰囲気はまるでない。



▲社員が昼食をとるリフレッシュルームの横にジムスペースがある。マシンやベンチプレスは小笹の自宅にあったもの。◀ 社員にはバランスのとれた弁当が330円で提供される。▼ 3階にはオンテックスのリフォーム技術の高さ、環境関連事業、温浴など健康・福祉関連事業が一目瞭然のショールームも。

▼会議室は景観が素晴らしい。世界中のホテルを視察し、インテリアをチェックするという小笹の粋を集めた場所といえる。

Photograph by Kuniko Okada

塗装工時代があるから今の自分がある

▲塗装工時代（写真左）、足場がない現場に遭遇。皆が帰る中、廃材を集めて足場にし、塗装した。「何とかなるんですよ、頭を使えば」

▲スーパー銭湯「蔵前温泉　さらさのゆ」が好調で、2号店「美笹のゆ」を建設中。総工費13億5000万円。2000坪の敷地を誇る。▶ 昔とった杵柄か、高所へあっという間に登ってしまう。▼ 事業部長の小さく作ろうとしたプランに「あかん、敷地めいっぱい使え」と檄。

ボクサー修業時代に匹敵する苦しみはない

子どもの頃の成績はオール2。地元で名前の知られた悪童だった。高校進学の気はまったくなく、中学を出て板前修業に出るが半年で退職。その後、塗装のアルバイトをしながらプロボクサーの道に進むも、デビュー戦で敗退。10代の少年に残されたのは、塗装職人という選択肢だけだった――。

塗装を中心としたリフォーム会社から、20数年で年商100億円を超える企業を作り上げる。それが、小笹公也の物語だ。

小笹は大阪で生まれた。家族は日本料理の板長だった父と専業主婦の母、姉、兄。8坪の小さな家だった。1階と2階に4畳半が2間ずつ。勉強好きで学業優秀だった2つ違いの兄のため、母はいつもこう言った。「勉強せえへんなら、外へ行ってや」。小笹は、喜んで外で遊んだ。

「勉強する理由がわからんかったんです。父からは手に職が大事や、言われてましたし。勉強の必要性を感じなかった」

やがてやんちゃ仲間ができ、中学では家に帰らない日々。喧嘩はほとんどしなかったがめっぽう強く、年上からも一目置かれる存在だった。だが、この悪童はちょっと変わっていた。働くのが、大好きだったのである。

「小学校高学年では新聞配達をしてました。中学でもいろんなアルバイトをしました。別にせんでもよかったんですけどね。勉強は嫌いやけど、仕事には興味があった。とにかく早く自立したかった。それこそ、みんなで夜中まで遊んで仲間の家で寝てるでしょ。でも、私だけは朝、ちゃんと起きて仕事に行くんですよ、律儀に（笑）」

それは自分に与えられた責任だ、と思っていた。中学を卒業すると、父に和歌山の結婚式場の板場に放り込まれる。だが、直後に板長が弟子を引き連れて転職。父の紹介で入った手前、小笹はついていけず退職を余儀なくされた。ボクシングと出合ったのは、その直後だった。

「悪さしてた仲間がジムに通ってましてね。やんちゃな男なら一度は憧れます。見たら、いっぺんに好きになってしまって」

むんむんとした熱気、男が力だけで勝負する世界。真剣で、嘘がない生き方の匂いがする。「この世界でやってみたい」。その日にプロボクサーになることを決めた。だが、待っていたのは、壮絶な日々だった。

「ジムに行くにはお金が必要。昼間アルバイトして、夜ジムに行って。減量でロクにものも食べず、激しいトレーニングをする。それはもう厳しかった」

仲間は次々にジムを去る。だが、小笹は辞めなかった。不必要だと思えば、どんなに簡単なことでもやらない。だが、逆に必要だと思えば、どんなに辛くてもやる。これこそ、小笹という男の本質だ。そしてこのとき、トレーナーから紹介されたアルバイトが、塗装職人だった。

「鉄塔、タンク、海岸沿いのクレーン。そんなものを塗り替える。高収入やけど危険で過酷です。しかも、終わってから辛いトレーニング。この頃に一生分の苦労をなめ尽くしたのかもしれません。以来どんなことも、この苦しさの比ではなかった」

小笹は著書にこう書いている。〝チャンピオンとは体力的に強い人をいうのではない。この、想像を絶する苦しさを乗り越えた、精神的な最強者に捧げられたタイトルなのだ〟と。

顧客の満足度を必ず葉書で送ってもらう。ひとつでも「不満」がつくと担当者は即呼び出し。給与は完全評価給。入社数年で年収1000万円を超える若手社員も。

社長室は約180㎡。「これほどの広さの社長室は見たことがない」と某アメリカの投資銀行の役員が驚いたという。黒が基調のモダンな部屋だ。

塗装のアルバイト、減量、ボクシング。どんな仕事もあれほど辛くはない

自宅は大阪が一望できる高層マンション。ベッドになるソファは来客が寝るため。冷蔵庫が4つあるのは来客にふるまう酒と肴のため。

23頭の馬主としての顔を持つ。G1を制覇する日もそう遠くはない!?

◀▶若い頃からの競馬好き。「経営はギャンブルではなく堅実なものと思ってます。だから、競馬という夢でときどき発散しないとね(笑)」。藤岡調教師とパドックや厩舎を見つつ「馬主ではなく、馬本意で調教をお願いしてます」。これは、ボクサーの育て方と通じるという。

▼▶最近、武豊騎乗で優勝したテーオーギャングの雄姿。小笹が競馬場にいないときに限って所有馬が勝つらしい。テーオーは小笹のイニシャルT.Oから。すべての馬に共通の名前だ。今年の当歳馬は4頭購入。いつの日かG1を狙う。

小笹公也が直伝&体現?オリジナル競馬必勝法

レース開始後はひたすら応援!なんと、万馬券が的中! 本日の換金は封筒がパンパンに膨らむウン百万円也!

最後は勘。時には「今日の日付で買うわ」と遊びの域にも突入。ただし、掛け金は半端ない!

絶対にパドックは見る。馬主席外からは遠すぎて「わからんなぁ」。

まずは軍資金をたっぷり用意。携帯電話で最新のオッズを確かめながら赤鉛筆を握りしめ、気になる馬を片っ端からチェック。

そして17歳でプロデビュー。しかし、厳しい仕事とトレーニングに、内臓が完治不能なほど弱っていた。医師の診断は腸カタル。だが、それは誰にも言わずリングに上がる。1ポイント差でデビュー戦敗退だった。

「続けるのは無理やと思いました。だから『辞めます』と。周りはびっくりしてました。理由は言いませんでしたから。でも、理由を言うと、負けた言い訳みたいで。だから、黙ってた」

17歳の少年が吹っきれたのは、バイト先の親方のこのひと言だった。「そろそろ仕事一本で性根を入れてみたらどうや」。

年商の8割、2億円を捨てる覚悟をした

塗装は性に合っていた。手先が器用で、すぐにかなりの腕前になった。粋がる性分から、人の嫌がる現場ほど率先して行く。荒くれ者が多い現場で、負けん気はプラスとなって現れた。そんな小笹を親方は買ってくれた。

「自分に厳しい人でした。他人に厳しい人間はなんぼでもおるけど、自分にも厳しい人は少ない。誰よりも早く現場に来る、みんなが嫌がる仕事を選ぶ、危険な現場は真っ先に自分が行く。人を従えるというのはこういうことか、と思いました」

もっといい仕事を、もっと早く。小笹は、自分でもさまざまな模索をする。最適な塗料の配合などに自分で取り組んだりもした。親方からチームを任されると、すぐに最強のチームになった。どの現場に行っても、スピードは最速。仕上がりも完璧。すぐに現場で名を知られた。

もうひとつ学んだのが、人を本気にさせる力だ。親方の面倒見の良さは、仕事だけではなかった。常に一人ひとりに気を配り、話を真剣に聞いていた。

そして4年。飲み屋で親方は言った。「お前、もう独立せぇや」。21歳で独立など、当時は前代未聞。「お前ならやっていける」。親方のそんな言葉に決意を固めた。当時唯一の財産だった乗用車と交換した古いライトバンと40万円、そして職人一人。オンテックスの始まりだった。

一年目で年商2000万円。4年目に職人6人で年商1億円を超え、3年目には自社ビル…。

「職人の世界でなんでそんなことができたか。マニュアルを作ったからです。現場別に一番いいやり方を全部、紙に書いた。そうすれば、若い職人の成長も早まるし、現場も管理しやすい」

職人の世界ではかってないことだった。だが、幸か不幸か、学校で一方的に教えられる教育に慣れていない彼は、いつも自分で考えることから始めた。それが大胆な発想を生んだのだ。

「見積もりをしたいが現場に行けない。それで、ビデオも導入しました。これなら、私が行かなくても現場がわかる」

新しいやり方を次々導入する一方、何より社員に気を掛けた。

「人はちゃんと見ると、表情でわかるんです。あ、なんかあるな、と。すぐ声をかけると案の定、交通事故を起こして相手と

陸海空を制覇する乗り物購入の真の意味は?

▲奥からヒュンダイのキャンピングカー、マイバッハ、メルセデスのゲレンデバーゲン。社員など、必ず誰かが乗る。キャンピングカーは多人数が寝られる優れもの。

▼クルーザーは3艇。職人の頃、親方からスキューバダイビングを教えてもらい、海が好きになった。釣ったカジキは元板前の腕を活かし、さばいて社員と一緒に食べる。この他旅客機も2機共同所有し、航空会社にリースしている。

自宅はいつも大勢が集まる場所。そのメンテナンスは自分で

▲数え切れないほどのカフリンクス。中には息子や娘からのプレゼントも。▼▶スーツのブランドは特定せず、出張時や娘と買うことが多い。私服もバラエティに富んでいる。この日着ているのはアルマーニの白レザーブルゾンにディオール オムのデニム。ネックレスは娘とお揃いのクロムハーツ。部屋の掃除、服のメンテナンスはすべて自分でやる。

「アンタは人の上に立つ男や」母の言葉が支えでした

学業優秀だった兄は、早稲田大学政治経済学部を卒業後、リクルートを経て、起業した。昨年12月に東証二部に上場したリンクアンドモチベーションの小笹芳央社長こそ、実は小笹氏の兄。この日は上場祝いに駆けつけた。

Photograph by Toshio Sato

Tomoya Ozasa

1963年、大阪生まれ。中学卒業後、ボクサーになるも挫折。
練習代稼ぎのアルバイトで塗装の世界に入る。
21歳で独立、1988年には株式会社に改組、代表取締役に。
独自商品の開発でリフォーム業へと事業を拡大。
2000年に社名をオンテックスに変更。02年には大検を受けて
同志社大学商学部に入学、オール「優」で卒業した。

モメてる。すぐに言うてあげるんです。『もう一切心配いらん。あとは全部ワシに任せ』って。表情はみるみる元に戻って、仕事を頑張れる。これをやるのが、上の仕事です」

だが、順調だった仕事もバブル崩壊で様相が変わる。仕事の奪い合いと凄まじいまでのコスト競争。このままでは未来はないと小笹は気づく。91年の年商は2億4000万円。うち2億円が下請けの仕事だった。だが元請けを目指し、2億円を捨てることを決断する。

「全売上の80%。まさに背水の陣です(笑)。でも、下請けで生き抜けるとは思えなかった」

営業経験などなかった小笹が、一般家庭に1日100軒の飛び込み訪問を続けた。一方、下請けの仕事はきっぱり断る。自身でのけじめだった。この大転換が会社の最大の転機となる。同業の下請け企業のジリ貧が続く中、売上高は急拡大する。そして96年、転機はまたやってきた。自社開発の塗料や外壁塗装技術で新しい事業を始める。

「一般家庭に営業して痛感したのは、ライバル会社の多さ。独自性なしには、絶対に生き残れないと思ったんです」

高級感のある石材風の外装塗料の独自開発商品が家庭に受け大ヒット。製品、工法と特許を申請した。開発型メーカーへの転身だった。ここから売上高は、倍々ゲームとなっていく。

運を引き寄せるのも自分の行動である

競馬が好きで馬主になった。所有するクルーザーの存在を喜んでくれているのは、何より若い社員だ。大型車を買うのは、車は自分だけが乗るものではないから。もっといえば、スーパー銭湯のような事業拡大そのものも、700人を超える社員の夢のため。小笹はそう断言する。

「この時代になんで多角化か、と聞かれることもある。でも、今のままでええんやったら、社員のみんなに夢がないやないですか。下の子らのために、ステージを作ったらなあかん。それが経営でしょう。若い社員を採用しとる以上、止まるわけにはいかん。もっともっと大きくなって、能力のある人間に力が発揮できる場を提供しないと」

そしてもうひとつ、彼を支えたのは、幼い頃から聞かされ続けた母の言葉だった。

「やんちゃして無茶苦茶な頃から、母は言うてたんです。アンタは人の上に立つ男や、と。それをずっと信じてました。これだけが心の支えでした」

一生懸命やっている人間は必ず報われる。それを、仕事を通じて知った。こんな経験がある。大きな建設現場の完成間近は修羅場と化す。工期は遅らせられない。空調、電気、内装など、いろんな業者が工期の後半に殺到、怒号が飛び交う。そんないきり立つ現場で、小笹らは常に黙々と必死の仕事をした。その姿は、荒くれ者たちの心を打った。殺気だった現場で、「おい、塗装のモンに先にやらしたれ」という言葉をもらったのは、一度や二度ではなかった。

「ここまで来られたのは、運やと思うてます。でも、運を引き寄せるのも自分、とも思う。一生懸命やってると大概はなんとかなるもんです。みんながあきらめるようなこともね」

すでに亡くなった母が晩年、息子に、よく電話をかけてきた。

「家の蛇口が壊れたんやけど」

「近所の人の戸口が傷んでるから直したって」

数十億円の企業の社長になっても、小笹はすぐに駆けつけた。

「見えへんものへの感謝、いうかな。それはいつも忘れんようにしてきたと思う」

中卒だった頃、彼は一度として自分の学歴を恥じたことはなかった。学歴だの肩書きだのといったものに、そもそもまったく関心がないのだ。彼が何より大事にしてきたのは、自分のすべての行動に〝筋を通す〟ことだったのではないか。これが、さまざまな大胆な決断を可能にしたのだ。だが、筋を通して生きることは実は簡単なことではない。だからこそ、多くの人は応援したくなるのだろう、この挑戦者を。目標は1000億円企業。彼は、本気である。

正反対の起業家兄弟が初の対談本を刊行

対極の経歴を歩んできた兄弟が奇しくも揃って起業家に。若者のやる気を起こす1冊。「自分のカラを破る 力が湧く言葉」(経済界・刊)

Photograph by Yukimasa Moro